

スタッフルーム
Staff room

私も最期までご飯を食べていたい

たなべ かおり
田邊 香織

(理工学メディアセンター)

私には同居していた母方の祖母がいたが、2021年3月20日のお彼岸に90歳で迎えが来てしまった。今回は祖母の話と祖母が好きだった「食べること」について書かせて頂く。

祖母はまさに万能な人だった。家事は全て完璧にこなし、裁縫も得意で料理は何を作っても美味しかった。80歳を超えても私が電卓を叩く間に二桁以上の暗算をして、電話やメールはもちろんLINEも絵文字・スタンプは当たり前で、社交性もあって誰からも頼りにされる人だった。そして何より食べるのが好きで、家の誰よりも食べる人だった。

77歳の時に心不全を発症し、それ以降何度か救急車を呼んだこともあったが、すぐに元気になって帰ってくるのできつとギネスブックに載るくらい長生きするだろう、と冗談抜きで思っていたが、89歳の時に訪問医師から、肺に水が溜まっているので取り除く手術が必要だと言われた。私はいつものように元気に帰ってくるだろうと、呑気に入院の用意をしていたが、祖母は座ったまま苦しそうに、もうこの家に帰ってこられないだろうと察しているようだった。

手術が終わっても、コロナ禍で面会が出来ないので、電話でお互いの近況を話し、携帯で病院食をおいしく平らげる写真を送ってくれた。会うことは出来ないが、それだけの報告でも嬉しかった。

しかし手術から数日後、祖母が歩けなくなってしまった。コロナ禍で外出ができず部屋にこもっていた影響と、手術後の安静が原因だった。さぞ落ち込むだろうと思ったこちらの心配も余所に、リハビリのために転院した病院の食事もお気に入り、当時冬だったこともあり、我が家が鍋ばかり食べていると言うと「こっちの方がよっぽど豪華だね」と悪戯っぽく笑われた。

リハビリも順調だったさなか、三日間せん妄状態になってしまい、それが原因で食事がとれなかったので喉の機能も上手く使えなくなってしまった。このまま食事をすると誤嚥性肺炎の危険があり、私と母は一日でも長く生きてほし

い気持ちから医師から勧められた流動食に切り替えることにした。

だがこの選択が大失敗だった。数日後、祖母の激しいボイコットが始まったのだ。祖母は酷く細くなった腕で、流動食が流れる管が潰れるほど、力いっぱい掴んで訴え続けた。

「これからずっと口から食べられないなら死んでいるのと同じ」

何度も話し合ったが、祖母の強い意志に根負けした医師と私たちは流動食をやめた。それからはたくさん食べられないものの食事をするようになると、医師や看護師にいつも感謝する、優しい性格に戻ってくれた。

2月13日の誕生日には病院側から特別に許可を得て、小さな誕生会を開いた。スポンジケーキは勧められなかったので、祖母が好きだった新宿TAKANOのプリンアラモードを購入し、大好きなイチゴも持って行った。とても嬉しそうに食べる祖母にホッとした。とろみをつけたお茶をスプーンで少しずつ飲みながら「水を一気に飲みたい」と苦笑していたが、それでも食べている姿は本当に満足気だった。

そして祖母は亡くなる前日までアイスを食べて過ごした。

一年以上経つ今でも「ご飯が食べたい」と必死に訴えた祖母を思い出す。果たして私は、祖母と同じ状況になったとき何を望むのか。動けなくなって、ベッドで一日中過ごすことになったら、私もきっと祖母と同じように「美味しいものが食べたい」と思うだろう。

コロナ禍が続く中、外食を自粛し、代わり映えの無い日々と共に、美味しいものへの執着も薄れつつある。だが、いつどんな状況で食べられなくなるかわからない。その時、私は後悔しない食生活が出来ているだろうか？ 祖母は私に食べ物こそが、生きる上で大切な糧なのだを教えてくれた。だから時々「生きているだけで偉い！」という大義名分で母と一緒に贅沢な食事をして、楽しかった祖母との思い出話に花を咲かせることにしている。